OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ 須藤訓任『ニーチェの歴史思想ー物語・発生史・系譜学』
Author(s)	竹内, 綱史
Citation	メタフュシカ. 2012, 43, p. 117-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26499
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《書評》

須藤訓任

『ニーチェの歴史思想――物語・発生史・系譜学』

竹内綱史

本書は、日本の哲学系ニーチェ研究の第一人者である著者の、待望の論文集である。一般読者の手には届きにくい媒体で発表されてきた非常に質の高い論文がまとめられ、書き下ろし等も加えられた上で、このような形になって刊行されたことは、誠に喜ばしいことであると言えるだろう。

「あとがき」にある初出一覧（419 頁以下）を見てもらえば分かるように、本書所収の諸論文のほとんどは、様々な場所にばらばらに発表されてきたものである。ここに採録されなかったものも含めて、私はかつて、著者の論文を集めるのに非常に苦労した覚えがある。それもあって実はだいぶ前に、「論文集を出すつもりはありませんか」と著者本人に尋ねたことがあるが、そのときは、「本当に読みたい人は、媒体が何であれ、読んでくれるからいいんだ」、と否定的な返答だった。著者の論文はもっと多くの人に読まれてしかるべきだと考えていた私は、それ以来ひそかに、いつか出版社に話をつけてから論文集出版に向けた説得をしよう、と思っていたくらいである。そういったこともあって、このたび本書が出版されたことは私個人としても感慨深いものがある。

本書は間違いなく世界レベルのニーチェ研究書である。おそらく多くの人は、本書を一読してみれば、そのニーチェ読解の深さと広がりに圧倒されることだろう。そしてニーチェのあまり目立たない単語や文章に込められている（と著者によって解釈される）意味の射程に、目を開かされることになるだろう。そして以後は、著者が提示した読み方以外に、ニーチェを読めなくなってしまうことだろう。

私自身、学生時代から著者の論文の愛読者だったが、今回、自分がいかに著者の論考に多くを負っているのかにあらためて気づかされた。ごくごく単純な一例を挙げるなら、本書のタイトルにもなっている「歴史」という主題に関して、著者は「ニーチェの思想と言えば、歴史と関係付けられることは比較的少ないかもしれない」と「序文」で述べているが（6 頁）、この認識に私は驚いてしまった。というのも、「ニーチェほど歴史に強い関心を寄せた哲学者も多くはない」（同

頁）という理解が、どこか私の中では「常識」になってしまっていたからである。だが、その「常識」は、考えてみると、私が著者から学んだことだったのだと思われる。というわけで、私自身のニーチェ理解も著者の大きな影響下にある。それを書評をするなんておこがましい限りだが、せっかくの機会を与えていただいたので、以下では思うことを述べてみたい。ただし、かなりの偏りがあると思われることをあらかじめご承知おきいただきたい。

まずは本書の内容を概観しておこう。目次は以下の通りである。

序文　歴史思想家としてのニーチェ
第 1 章　物語としての歴史――『悲劇の誕生』の思想圏
第 2 章　問題群としての「生に対する歴史の利と害について」
第 3 章　「思考の発生史」、「習俗の倫理」、「よきヨーロッパ人」
第 4 章　認識者の系譜学――「時代」という名の自己
第 5 章　「歴史精神」とは何か――ニーチェとマッハ
第 6 章　同時代の「根源」へ――『ヴァーグナーの場合』を読む
補論 1　「転移」としての言語 ――初期ニーチェの場合
補論 2　ニーチェの「正義」論再考 ――「力への意志」の尺度をめぐって
補論 3　ニーチェの「経済」思想 ――アヴェナリウス－マッハによる「あとからの影響」
補論 4　ヘーゲルとニーチェ ――歴史をめぐって
あとがき

著者によると、「本書の意図」は、初期から晩年に至るまでのニーチェの歴史に関する「思想的変遷を――変遷の内在的理由ともども――追跡することにある。そこには歴史に対する「思い込み」を自覚化し、その問題点を摘出し解決の糸口を見いだそうとしていく経過が明確に認められるが、それはまた「歴史」認識の問題性の深化の過程と形容してよいものである」（9 頁）。その「深化の過程」は、ニーチェ哲学の思想的発展に関する定説通り、三段階として想定されている。そして本書のサブタイトル「物語・発生史・系譜学」は、その三段階に対応するものとなっているのである。その概略は以下の通りである。

第一段階：「物語」　ニーチェの哲学上の処女作『悲劇の誕生』は、歴史を、人生に意味を与えるような「大きな物語」として構想したが（第 1 章）、その構想は挫折した（第 2 章）。「「世界史」を動かしているのは「大きな物語」を貫く高尚な理念などではない」こと、「「大きな物語」とは人間の願望が分泌する幻想に過ぎない」ことに、ニーチェは気づいたのである（61 頁）。「むしろ、日常のごく些細な出来事の方が、よほど重要な帰結をもたらすのであって、どんなに立派なことを大言壮語しようと、そこに巣食っているのは平凡極まりない、醜くあざとい欲望でしかない」のだ、と（同頁）。

第二段階：「発生史」　人間的事象を形而上学によって正当化しようと試み、歴史的思考を形而

上学的に相対化しようとした初期に対し、中期（『人間的、あまりに人間的』『曙光』）になるとニーチェは形而上学的思考の「発生史」を問うようになり、あらゆる事象は歴史的に相対化されることになる（第 3 章）。「あらゆる「人間的」事象の現世的発生の事情を突き止めるという「歴史的」課題」が追求され、「歴史による超歴史の相対化」が目指される。つまり、「「歴史」は相対化の対象から、相対化の方法へと転」じたのだ（98-99 頁）。「歴史は認識される内容なのではなく、認識の学的方法に転換された」（12 頁）。しかしながら、そこには〈形而上学的思考と歴史的思考〉という二項対立が残っており、未だ形而上学に束縛されている。形而上学的歴史哲学の否定から一種の刹那主義を導き出してしまっているのだ。「形而上学的原理の無効化から歴史の長期的展望の不可能性を帰結させるとしたら、それは依然として形而上学的発想に拘束されている証であろう」（同頁）。

第三段階:「系譜学」 中期の問題は、時代批判の戦略に関して言うならば、「起源と現在の癒着」（174 頁）が断ち切られていないという点にある。例えば、中期のニーチェは、道徳の「起源」が恥ずべきもの（人間の利己性）であることを「暴露」して道徳を批判したつもりになっていたが、それは利己性＝悪という道徳を前提にしてしまっており、実は、批判であるどころか、現在の道徳を強化するような発想でしかなかったのだ。「現在支配的な道徳の起源が非道徳的であるからといって、その価値が貶められる必要がないばかりか、貶めようという心的傾向が作動してしまうことがそれ自体、現在の道徳に拘束されていることの一証左にすぎない」（181 頁）のである。晩年の『道徳の系譜学』と『ヴァーグナーの場合』によって、ニーチェはこの問題を解くことになる（第 4 ～ 6 章）。すなわち、「語源学」という学問的「物証」によって起源と現在の双方を相対化する視点を導入し（第 4 章）、マッハの影響から歴史の「偶然性」を洞察し（第 5 章）、ヴァーグナーという「拡大鏡」によって同時代の本質を分析する手段を手に入れるのである（第 6 章）。「ニーチェの歴史思想」は、ここにその完成形を持つに至ったのだ。

以上が「本論」の内容であるが、その白眉は何と言っても第 4 章と第 6 章であろう。『道徳の系譜学』については近年世界的に研究書が続々と刊行されており、ニーチェ研究の一大中心となっているが、本書第 4 章の議論は世界水準からしてもトップレベルの深度と明快さを備えていると断言できる。そしてまた、「ニーチェの歴史思想」と言えば『道徳の系譜学』で頂点に達すると考えるのが一般的だが、そこで取りこぼされた同時代認識・批判という問題が次著の『ヴァーグナーの場合』に引き継がれ、解かれているという第 6 章の主張は、極めて斬新な解釈であり、なおかつまた、否応の無い説得力も備えている。

さらに、本書は「本論」が第 6 章で終わるが、続く 4 つの「補論」もまた、日本のニーチェ研究史に残るであろう小品ばかりであると言っても過言ではない。補論 1 は、ポストモダン的ニーチェ解釈の一主戦場となった「道徳外の意味における真理と虚偽」という小論文に盛られた初期ニーチェの言語論の分析であり、その方面の基礎文献となるだろう。補論 2 はハイデガーによってニーチェ哲学の最終到達点と見なされた「正義」論に関する論考である。「力への意志」における力の「強さ」とは、「正義」のことなのである。補論 3 は、ニーチェの自然科学との関わりと、「神の死」という言葉の意義を、「思惟経済」という点から論じたものであるが、個人的に私は以

前からこの論文が著者の「主著」であると考えていたくらい、扱っているテーマの重要性と分析の鋭さ、そして著者一流の視野の広さが見事に調和した素晴らしい論考だ。補論 4 は、ニーチェを読む者なら誰しもが気になるテーマ、「ヘーゲル－ニーチェ」問題についての著者による見解のまとめである。この 4 つの補論は、これまでのニーチェ研究ではあまり見られなかったテーマを扱ったものばかりであり、著者の創見が多く含まれた出色の論文が厳選されて収録されている。これらもまた、「ニーチェの歴史思想」はもちろんのこと、ニーチェ研究全体にとって、大きな寄与であると言える。

以上のように、本書は「本論」では「ニーチェの歴史思想」についての発展史を描き、「補論」には周辺テーマについての諸論考が収められている。とはいえ、本書はそれに尽きるものでは全然ない。そもそも、扱われているテーマは、「ニーチェの歴史思想」と言うには、あまりに多岐にわたっている。これは「論文集」の難しさなのかもしれないが、それぞれの論文は別々の文脈で構想されているので、本書全体のテーマからすると、触れられる必然性がそれほど明確ではないような話題についても多くの頁が割かれている。先に、「ニーチェの歴史に関する思想的変遷を追跡すること」という「本書の意図」（9 頁）について言及したが、いま述べたように、実際は、初めから「意図」されて書かれたものではなく、多くの論文を一つの本にまとめるにあたっての、編集上の「意図」と言う方が適切だろう。あるいは、著者が多く論文を書いている過程で結果的に浮かび上がってきたような「意図」であり、厳密には誰の「意図」なのかは分からないものである。要するに本書は、扱っている内容の広がりからすると、少々題名が控え目すぎるのではないかと思われるほど、豊かな本なのである。

さて、賛辞や紹介はこれくらいにして、書評者の第一義的な仕事である、批判的なコメントという気の重い作業に取りかかることにしよう。とはいえ、ニーチェ解釈上の個別的な論点について、ここでいちいち取り上げようとは思わない。著者の解釈について、私は疑問とする点が少なからずあるけれども、個別的な論点については私自身の諸論考を参照してほしい[1]。ここでは、著者の研究のスタイルないし方法について、若干のコメントをしてみたい。

哲学研究というものは基本的に、研究者個人の問題意識とテクスト読解との言わば弁証法的関係であるわけだが、そこから、問題意識が突出している人と、テクスト読解に重点を置く人とで、研究者は大きく分けて二種類いることになる（当たり前だがこれは程度問題でしかないが）。少なくとも本書などの論考を読む限り、著者は明らかに後者である。中心的な問題意識が何である

[1] 以下の諸論文は、多かれ少なかれ、本書の著者の議論を念頭においている。竹内綱史「アポロンとソクラテス――『悲劇の誕生』の歴史哲学再考」（大阪大学大学院文学研究科哲学講座編『メタフュシカ』第 40 号、2009 年、13-26 頁）、同「『悲劇の誕生』の形而上学再考」（龍谷哲学会編『龍谷哲学論集』第 25 号、2011 年、1-32 頁）、同「『生に対する歴史の利害』の問題圏――理論の批判から批判の理論へ」（実存思想協会編『実存思想論集 XXIII アジアから問う実存』、2008 年、139-156 頁）、同「自由精神と自由意志――『人間的、あまりに人間的』におけるニーチェの自由論」（関西倫理学会編『倫理学研究』第 38 号、2008 年、100-111 頁）、同「ニーチェの実験哲学」（『理想』第 684 号、理想社、2010 年、61-74 頁）、同「ニーチェ――絶対の喪失という希望」（伊藤直樹・齋藤元紀・増田靖彦編『ヨーロッパ現代哲学への招待』、梓出版社、2009 年、27-55 頁）、同「ニヒリズムと系譜学」（ハイデガー・フォーラム編『Heidegger-Forum』Vol.6、2012 年、1-13 頁）。

のか、そもそもそれがあるのかどうか、分からないくらいである（だからこそ、本書の「意図」をめぐる上に述べた困惑が生じているわけだ）。その一方で、ニーチェのテクストの「忠実な」読解について、著者ほど信頼の置ける研究者はなかなか存在しない（テクストへの完全な「忠実さ」なるものが存在し得ないことを深く自覚していることも含めて）。

特徴的なのは、ニーチェの文章や表現から読み取れる（一見些細な）違和感に、徹底的にこだわる読解であろう。普通なら読み飛ばしてしまうような表現から、その著作全体、さらにはニーチェ哲学全体の理解を大きく変えてしまうような読解が導き出されるのだ。言わば「目のつけどころ」が極めて独特かつ鋭い。例えば、「ソクラテス以前」ではなく「プラトン以前」という、ニーチェによるギリシア哲学の分類法について（40 頁以下）、『歴史の利と害』のタイトルについて（68 頁以下）、『ヴァーグナーの場合』のサブタイトルについて（245 頁以下）、等々。他にも挙げればきりがないが、ところどころで、それも議論のポイントとなるところで、はっとさせるような、目から鱗が落ちるような、表現の綾の解きほぐしを見せてくれる。恐らく、それぞれの著作について、ニーチェについて、詳しければ詳しいほど、著者独特の読解の鮮やかさに心打たれるのではないかと思われる。

けれどもその一方で、主張の裏づけや議論展開の厳密さに関しては、通常の学問的手続きが踏まえられていないように思われる箇所が多く見られる。アヴェナリウスやマッハの影響に関してはしっかりとした論証がなされているものの（第 5 章および補論 3）、例えば『歴史の利と害』に対するテオグニスの影響に関しては（74 頁以下）、状況証拠はある程度揃っているが、「論証」までは至っていないと言わざるを得ない（これは自らの主張を「突拍子もない仮説」と表現する著者自身も認めるところであろう）。また、鮮やかな読解に隠れて気づきにくいが、論理展開に隙が多いし、文献等によって十分に裏づけられてはいないように見える主張が散見される。著者は、ある程度の状況証拠さえあれば、解釈の質で勝負できると考えているのだろう。その解釈の質――それは、その解釈によって一見矛盾しているようなニーチェの諸々の主張に筋が通って「腑に落ちる」かどうかといったことで測られるものだろう――が極めて高いのでかなりの説得力を持ってはいるが、よくよく考えてみると疑問なしとしないことがあるのである。

一例を挙げるならば、『道徳の系譜学』が問題にした「起源と現在の癒着」に言及した後、次のように続いている。「すなわち、事象は、なかんずく道徳は、その本質を「起源」から「現在」まで首尾一貫した無変化なものとして構想する観点から、評価されるべきだという発想がそもそも、道徳的なのだというのである」（181 頁）。この「すなわち」は、全然言い換えになっていない。首尾一貫していることをも「道徳的」と形容するのは、議論として唐突である。おそらく著者もそのことに気づいてか、この文章には注が付いているが、それはまた別の議論になってしまっていて、結局つながりは判然としない。著者の中には「すなわち」の内容があるのかもしれないのだが、少なくとも文面上は明確に表現されているとは言いがたい。こうした議論がしばしば見られるのである。

また、著者の方針として、現代的諸問題や現代的論争には、禁欲的に、関わらないことにしているようだが、それは読み手としては物足りなさが残る。「アクチュアルな重大問題にコミット

したり判定を下す資格も能力も余裕も現在の筆者にはない」（19 頁）と言うが、個人的に著者を知る者としては、著者にそうした「資格や能力」が無かったら、いったい誰にあると言えるのだろうか（確かに「余裕」はないのも知っているので、複雑だが）。もっともそれは、欲ばりすぎなのかもしれない。

最後に、本書をニーチェ解釈･研究史の中に位置づけておきたい。本書は、私の理解では、「ポストモダン的ニーチェ研究」の一つの達成である。「ポストモダン」という響きで勘違いしてほしくないのだが、本書は「ニーチェ研究」であって、単なる「ニーチェ論」や「ニーチェ解釈」に留まるものではない。先に述べたように学的手続きには少々不満が残るとはいえ、まぎれもなく本書は非常に高度な専門研究である。

ニーチェ解釈は、研究史上、実存主義的解釈とポストモダン的解釈の、大きく二つに分けることができる。実存主義的解釈には、ヤスパースやレーヴィット、フィンク、そしてハイデガーといったドイツの巨匠たちが含まれるわけだが、日本では西谷啓治から始まり、最近では新田章氏の研究などが代表的だ。特徴的なのは、個々人の「生き方」に関心が集中し、歴史に関しては、「ニヒリズム」という「運命」といかに個々人が格闘するかということばかりが問題となるという点である。本書が扱っているような歴史認識の問題性といったことには、ほとんど関心が払われない。ニーチェの思想が「歴史と関係付けられることは比較的少ない」（6 頁）という先に引いた本書の文章は、おそらくこの実存主義的解釈を念頭に置いたものだと思われる。

それに対し、ポストモダン的解釈は、ドゥルーズやクロソウスキー、フーコーといったフランス現代思想系のニーチェ解釈に端を発し、最近ではアメリカのネハマスの研究等が知られている。日本では著者以外には村井則夫氏の研究等が代表的だろう。実存主義的解釈が個と普遍の関係にばかり集中していたのに対して、特殊の領域、つまり、言語・解釈・文化・身体・歴史、といったテーマを中心とするのが特徴である。本書が扱っているテーマはまさにこれである。

これら以外に、日本では特にゲルマニスティーク系のニーチェ研究が広く知られているが（三島憲一氏など）、それらは一般的に言って、ニーチェ哲学そのものの解釈としては実存主義的解釈を採用していることが多い。また、1960 年代から刊行が始まった批判版全集のおかげで文献学的な研究も大きく進展しており、日本でもそれは紹介されている（ミュラー＝ラウターの研究など）。それらの成果は、あまり表立ってではないが、本書にも当然踏まえられているものである。

「あとがき」には、「本書は、著者による三十数年に及ぶニーチェ研究の、現在の時点での総決算的成果である」（419 頁）と述べられている。さらに付け加えるならば、本書は、日本のニーチェ研究全体の、「総決算的成果」である、と言ってよい。本書から、日本のニーチェ研究は、「一段と高い歴史に踏み込む」（ニーチェ『愉快な学』125 番）ことになるだろう。

（たけうちつなふみ　龍谷大学・専任講師）